

2016年
12月21日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／平山 健二郎 教授（金融論）

アインプリット&コンプリット

私が関西学院大学経済学部にお世話になって22年が経ちました。大学院を終えて最初に奉職したのが京都産業大学で、そこに四年間勤め、その次に関西大学で八年お世話になり、さらに関西学院大学で22年間奉職しまして、計34年間の教員生活でした。この二月で65歳になるのもって、68歳の定年より三年早く退職することに致しました。後進に道を譲る、というのはウソでして、仕事から解放されて、ノンビリしたいというのが本音です。

私は三つの大学に奉職したわけですが、色々な大学を経験できて幸せだったと思います。また学生としても、一橋大学経済学部の学部生のときには一年間、アメリカのリベラルアーツカレッジに留学させてもらったり（幸運にもサンケイ・スカラシップという奨学金を頂いて、メイン州

のベーツ・カレッジという大学で勉強しました）、大阪大学の大学院で修士を取った後は、アメリカのイェール大学の大学院に五年ほど留学しました。留学というのは本当に貴重な経験だったと思います。外国に住むことでその国とそして日本に対する関心・理解が深まるように思います。

日本では「転石苔を生ぜず」という諺があるように、石は一箇所にとどまって、苔をむすほどになる方が望ましいという考えがあるようです。日本の国歌でも「こけのむすま」と謳っており、やはり苔が生えることが賛美されているようです。ですので日本では長らく、同じ会社で一生を過ごすことが理想とされてきたようです。

それに対してアメリカでは有能な人間はどんどん転職して、経験を積

むのが望ましいとする考えがあるようです。ノーベル物理学賞を受賞したりチャード・ファインマンの自叙伝『ご冗談でしょうファインマンさん』を読んでいた以下のエピソードが紹介されていました。彼がMITの学部四年のときに先生が「リチャード、君は大学院に進みたいと思うのだが、どこの大学院に行くのかね？」「はい、もちろんMITです。」「なぜだ？」「だって、MITは世界一の大学だからです」「だからこそ、君はプリンストンに行くべきなのだよ」というやりとりがあったそうです。世界にはMIT以外にも優れた大学がたくさんある、そういう大学を経験すべきだ、ということなのでしょう。

そういう意味で私は学生として日本で二つ、アメリカで二つの大学を経験し、教師となつてからは三つの

大学で働く経験を積むことができたのは本当に幸いなことだったと感謝致しております。さて、22年前に関西学院大学経済学部に参加して驚いたのは教育熱心な先生方が多いことでした。多くの先生が本ゼミ以外にサブゼミも担当されていると知り、大変驚きました。が、確かに90分の授業と言っても出欠を取ったり、アナウンスをしたり、発表当番の相談をしたりしていると、勉強の部分は六十分程度になってしまいきます。ですので、とくに三回生の場合にはサブゼミをすることで、勉強の時間を十分確保できることになりました。そのように教育に時間が取られるのですが、よくしたもので、手間暇をかけると学生さんもそれに応えてくれて、懸命に勉強し、伸びてくれます。そのような学生さん達に恵まれたことを心から感謝したいと思います。

います。

さて、過去のチャペルアワーではできるだけ良書を紹介するように努めてきました。タイトルに書きましたように、何かアイディアとか提案をアウトプットしようとする、そのための材料がインプットされないといけないと駄目にして、その意味で読書は必須の手段です。学生さん達には是非、読書をお勧めしたいと思いません。

ちよつと私の読書履歴をご紹介しますと思います。小学校の頃は自宅に置いてあった偉人の伝記をよく読みました。伊能忠敬、二宮尊徳、徳川家康、エジソン、ライト兄弟、リンカーンなどです。また祖母が買ってくれた『トムソーヤの冒険』は何度も読みました。マーク・トウェインの小説は面白いだけでなく、人生の教訓に満ちているように思えます。中学校で読んだ本でもっとも印象に残っているのは明治期に日本政府のお雇い外国人であったエルヴィン・フォン・ベルツの残した『ベルツの日記』（岩波文庫）でした。外国人の目から見た日本人の行動・思考が描かれており、西欧と日本の違いに興味を覚えました。私は中学高校時代には天文気象観測部というクラブに入っており理科少年でした

が、高一のときの社会の先生にサムエルソンの『経済学』というテキストを勧められて読んだところ、自然科学とは違う社会科学の面白さに目覚めて、岩波新書で『資本主義の歴史』（レオ・ヒューバーマン）、『ケインズ』（伊東光晴）などを読み、経済学部に進むことを決意したのでした。

しかし憧れの一橋大学経済学部に入学したものの、経済学の授業はちつとも面白くありません。その頃に出合ったのが、アルベール・カミュ『シジフォスの神話』『ペスト』『異邦人』などの不条理の哲学の書でした。世の中は「ばかっている」と観念すると、気が楽になりました。大学時代はカミュに救われたという気がします。大学・大学院時代に感銘を受けたのは他にも山本七平氏の著作（とくに『日本人とユダヤ人』『空気の研究』）があります。これらについては昨年のチャペルアワーでご紹介しました。

その後の人生での愛読書は『福翁自伝』と『平家物語』でしょうか。前者は江戸末期から明治にかけて活躍した福沢諭吉の自伝であり、後者は人形浄瑠璃や歌舞伎に多く採り入れられた軍記物語の傑作です。『福翁自伝』を読むと、明治維新前後の

躍動感あふれる時代の変化が心を躍らせてくれます。しかし、一方、我々の日常生活の中で物欲に駆られてあれやこれを買っても、嬉しいのは当座のことだけで、結局は満たされない思いが残ります。モノの世界に虚しさを覚えたときに『平家物語』を読むと、栄華を極めた人でさえ、いずれは滅びるという栄枯盛衰を感得することができません。

いずれにせよ読書は楽しいものですし、そして色々な知識や考え方を学ぶことのできる宝物です。皆さんも是非、色々なジャンルの本を読んで、人生を豊かにしてください。